

＜追想＞あるマレーシア研究者のフィールド経験 ——ジオグラファー×フォトグラファーの「語り」——

A Retrospective on a Field Researcher's Experiences Studying
Malaysia: as Geographer × Photographer

藤巻 正己*

要 旨

筆者（以下、私）はこれまで、その時々^々の研究テーマに導かれ、「マレーシア的なるもの」とは何かを探求すべく、マレーシア各地でフィールドワーク^{フィールド}に取り組んできた。調査地では、観察やインタビュー調査など身体を使ったさまざまな仕事^{ワーク}が求められるが、そこで体感、獲得できた＜身体知＞こそが、エリアスタディにとって不可欠なものであることはあらためて述べるまでもない。私はその＜身体知＞を内実化すべく写真撮影に努めてきた（そのコンテクストをも意識しながら）。地域性や場所性、そして場所愛^{トポフィリア}（トゥアン、1992）にこだわる人文地理学出身の私にとって、景観論的アプローチは自明のこととはいえ、現場のリアリティをいかに記録し、フィールドワークの成果物としてのモノグラフを通じて、読み手に対して現場のリアルな風景（場景）と私が感受した心象風景（情景）とを、臨場感を以てどのように伝えられうるかを意識しながら現地調査を実践してきた。その際、叙述だけでは伝えきれない場景や情景を写真というメディアを介して、私が「その時／その場」で目の当たりにし、直感された現場の風景を素材に地誌的記述を試み、読み手の地理学的想像力を喚起させることを常に念頭に置いてきた。そ

* 立命館大学文学部特任教授

うといった意味において、私は現場主義者であり、ジオグラファーであるとともにフォトグラファーたらんことを心がけてきた。

それゆえ、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）禍という厄難のため、マレーシアでの現地調査をこの2年間実践できていない現在の私は、フィールドワーカーとして「宙づり」状態にあるといえる。しかし、コロナ禍の機会にこそ、これまでのマレーシアにおけるフィールド経験を回顧しながら、「リアルなフィールドワーク」の意義を再確認するとともに、フィールドワークおよびフィールドワーカーとは何であり、どのようであるべきかについて自省的に考えてみたい。

Abstract

Guided by the research topics of the times, the author (hereinafter, “I”) has been engaged in fieldwork, an essential requirement for area studies, in various parts of Malaysia, exploring what “Malaysian-ness” is. Field research requires one’s body be put to work in various ways, making observations, conducting interviews etc, and it goes without saying that the “embodied knowledge” experienced and obtained in doing so is essential for area studies. I have strived to distill this “embodied knowledge” in my photography (while also being aware of its context). As a human geographer obsessed with locality, place and love to places (*topophilia*), the landscape theory approach is obvious to me. However, I have practiced field research conscientious of how to record the realities of the field and how to convey the real landscape of the site and the mental landscape I perceive with a sense of realism through the monographs, which constitute the product of my fieldwork. Using the medium of photography to describe sights and scenes that cannot be conveyed by narrative alone, I have attempted to geographically describe the landscape of the scenes as I witnessed and intuited at “that time and place,” with stirring

the viewer's geographic imagination always at the forefront of my mind. In that sense, I am a person who puts special emphasis on the real field itself: I have always tried to be both geographer and photographer.

That said, as a result of the calamity that is the COVID-19 pandemic, I have been unable to conduct field research in Malaysia for the past two years, and as a fieldworker I am now in a state of "limbo". I hope, however, to use the pandemic as an opportunity to look back on my experiences in the field in Malaysia to reconfirm the significance of "real fieldwork," and self-reflect about what fieldwork is, and what it should be.

キーワード：マレーシア研究、フィールドワーク、フィールドワーカー、写真撮影、ジオグラファー、フォトグラファー

Keywords : area study of Malaysia, fieldwork, fieldworker, photograph, geographer, photographer

1. コロナ禍のフィールドワーカー

2021年9月現在、昨年来の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）禍という厄難のため、マレーシアでの現地調査はこの2年間実践できていない。つまり、フィールドワーカーとしての私は現在、「宙づり」状態にある。しかし、筆者（以下、私）のマレーシア研究は決して中断してはいない。過去30年にわたり撮影してきた膨大な写真を整理し、フィールドノートをもとに毎日書き込んだ分厚い日誌や新聞記事の切り抜きなど、さまざまなデータをあらためて読み返し再解釈する作業を通じて、現場への身体的移動はできないにしても、私は「あの時／あの場」に立ちもどることができるのだから。また、進化し続けるインターネットなどの情報技術によって、私は過去にも現在にもフィールドへ瞬時に移動トランスポートもできる。たとえ生の現場での観察や写なま

真撮影、現地の人々との出会いや会話はできないにしても、少なくとも現地の文字・画像情報の入手は容易になってきている。E-mail や Line によってフィールドで居合せ、世話になった友人との交流は継続できている。Line のビデオ通話や Zoom を介すれば、彼らとオンライン画面上で居あうことも可能である。つまり、現場でのリアルな身体経験をともなわないにせよ、私のフィールドワークは続けられているのかもしれない。

以上をふまえながら、マレーシアでの現地調査を寸断させたコロナ禍という災厄の機会に、私のマレーシアにおけるフィールド経験を回顧しながら、あらためてフィールドワークとは何か、フィールドワーカーとは何者なのかについて問い直してみたい。

2. 私のマレーシア研究の軌跡

本題に入る前に、私のマレーシア研究をふり返ってみたい。人文地理学徒の私は、1980年代半ば頃から今日に至るまでマレーシアを対象としてエリアスタディに取り組んできた。地理学が目指すところの当該地域の際立った特性、すなわち<地域性>を探求し、その地誌的記述を試みることを目指してきた。具体的に言えば、マレーシアのさまざまな地域現象や社会問題を切り口にして「マレーシア的なるもの」(Malaysian-ness)を読み解き、その全体像を学際的総合的に描こうとしてきた。図1は、私の過去30年余りのマレーシア研究の軌跡を俯瞰したものである。一見、系統だってみえるが、それはあくまでも「今、振り返ってみれば、このようにあとづけできるだろう」といった類のものである。

私のマレーシア研究は、首都クアラルンプル（以下、KL）の都市化をめぐる問題に関心を払うことから始まった。それは、第二次世界大戦以降、開発途上国の都市研究において重要な論点となっていた貧困層の膨張をともなう「過剰都市化」論に関わるものであった。私は、とくに東南アジアに広く

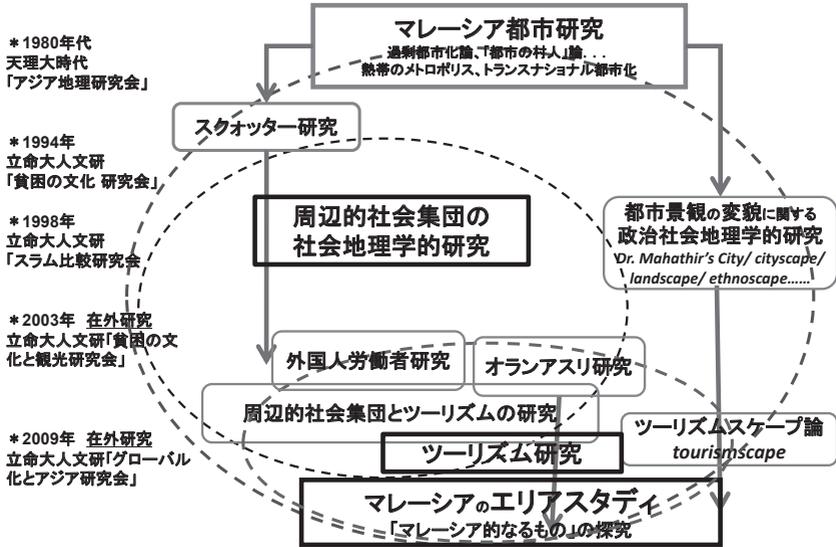


図1 私のマレーシア研究の軌跡

分布し、過剰都市化の景観の表象ともいえるスクォッター集落の実態とそれらをめぐる政策のあり方について強い関心を抱いた（藤巻, 1990; 1993; 2000b）。スクォッター集落とは、無断で公有地や私有地を占拠する人々（スクォッター）による不良住宅地区を指すが、行政や主流社会からは、社会的に逸脱した貧民街あるいは「スラム」という蔑称のもとにネガティブな眼差しがむけられていた。しかし、その実態はどうなのか、住民の「肉声」に耳を傾けながら、内側から彼らの生活世界を知りたい、という問題意識から、フィールドワークをともなうスクォッター（集落）研究が始まった。

最初の調査地は、KLの繁華街のチャイナタウン近傍に所在する、廃線となった鉄道沿線のインド系集落のKg.Davidson（仮称。Kgはマレー語で「村」を意味する *kampung* の略称）であった（写真1・2）。私は、1986年夏の2か月間、その集落に通った。フィールドワークの成果は「中間報告」としてまとめられたが（藤巻, 1989）、その後、米国の社会人類学者のオスカー＝ル



写真1 Kg.Davidson : KL チャイナタウン近傍のインド系スクォーター集落
廃線となった鉄道沿いに放置されていた職員宿舎への無断居住とその周辺域での掘立て小屋の占拠による。住民の多数はインド系だが、マレー・華人系住民も混在する。ダウンタウンやバスターミナルに近接するこの地は、貧困層が生き抜いていくために絶好の居住地なのだ(1986年8月4日撮影)。



写真2 Kg.Davidson : 空き家となった鉄道職員の長屋に暮らすある家族
私が懇意にしてもらったJ氏の家族。土木建築請負業を生業とするJ氏は近隣の屋台向けの軽食を調理、配達することを副業としていた。その手伝いを家族が担うことで、中古のトヨタ・カローラ(写真上の車)も所有できるほどの家計収入を得ることができていた(1986年8月5日撮影)。

イスによる「貧困の文化」論に対して批判的な文化人類学者たちの研究会（「貧困の文化研究会」、後の「スラム比較研究会」）に誘われたのがきっかけとなり、「中間報告」はジオグラフィーとエスノグラフィーとが混濁した論稿に書き改められ、江口信清編『「貧困の文化」再考』（1997）に収められることとなった（藤巻, 1997）。

その後、私のフィールドは、ゴールドントライアングルと呼ばれる KL 最大の繁華街の一角にあって、ホテルとコンドミニアムの建設予定地に残存していた Kg.Chendana というマレー系集落に移った。そこでの調査は 1998 年の夏から住民の立ち退きが完了する 2005 年 2 月まで断続的に続けられ、2003 年 9 月から翌年 2 月までの在外研究期間中には集中的にフィールドワークを行うことができた（写真 3・4）。その研究成果である「クアラルンプルの都市美化政策とスコッター——新聞記事に描かれたスコッター・イメージ」は『生活世界としての「スラム」——外部者の言説・住民の肉声』（藤



写真 3 Kg.Chendana を俯瞰する

KL タワー（1996 年竣工、421m：立地する丘の高さを加えると 515m）展望台より俯瞰したマレー系スコッター集落（写真中央に密集する家屋群）。写真右下には四つ星ホテルが立ち、写真左上のクラン川沿いでは高架自動車道の建設が始まっている。1950 年代からクラン川沿いの洪水常襲地帯に 50 年間存続してきた「都市の中の村」も開発の波に呑み込まれようとしている。KL を訪れるたびに、私は KL タワー展望台より熱帯のメトロポリスの建造環境や市街地景観（cityscape）の変貌ぶりとともに、Kg.Chendana の姿を写真におさめてきた（1997 年 8 月 24 日撮影）。



写真4 Kg.Chendana：集落内を歩く

集落の中を住民のN氏に案内してもらおう。浸水にしばしば脅かされ、水はけが悪いため無造作に敷かれた板の上を歩く。その先には、麻葉や大麻（ガンジャ）の取引先となっているムスリム墓地がある。N氏は、1998年に私がこの集落を初めて訪れ、知己を得てから2005年の立ち退きまで世話になった人物である。よそ者にすぎない私を＜包容＞してくれた彼とは今なお友人関係は続いている（2002年8月13日撮影）。

卷, 2001) に収められている。書名で明らかなように、この論稿は、Kg.Chendanaの内側に身を置き、そこに暮らす人々の生活実態にふれながら彼らの「肉声」に耳を傾け、外部者のスコッター集落をめぐる言説と住民の生活世界との乖離を批判的にとらえようとした社会地理学的かつエスノグラフィック的作品となった。ちなみに、Kg.Chendanaにはバングラデシュやインドネシアからのムスリムが転入しはじめていたことや、KL郊外のインドネシア人労働者による約1万人規模のスコッター地区を訪れたこともあり、私の新たな研究テーマとして、マレーシアにおける周辺的社會集團としての外国人労働者をめぐる問題が浮上することとなった（藤巻, 2000a; 2017; 2019）。

スコッター研究と並行して、KLの建造環境の急激な変化、都市景観(cityscape, urban landscape)の変貌ぶりにもフィールドワーカーとしての私の関心は向けられた。この熱帯のメトロポリスを訪れるたびに、KLタワー

の展望台などの高みから、変わりゆく市街地や郊外を俯瞰遠望し、定点観測的に写真撮影をおこなった（写真5）。1981年、第四代首相に就任したマハティールの20年に及ぶ治政下、経済・金融のグローバル化のなかでマレーシアは産業国家へと急成長をとげ、「世界資本蓄積の劇場」と化したKLおよびその周辺地域ではさまざまな国家的メガプロジェクトが同時進行し、1980年代には「スクォッター都市」と揶揄されたKLが1990年代末には世界都市地図に刻み込まれ、年を追うごとにスペクタクルなムナラ（*menara*:マレー語でタワーを意味）都市へと変貌していったことが一望できたからである。こうした「マハティールの都市」と評されたKLの景観の地理は「マレーシア的なるもの」の空間表象として解釈し、多くの写真画像を挿入するかたちで、私は都市誌的記述を試みた（藤巻, 2003; 2007; 2009a; 2009d; 2017）。

マハティール時代に急ピッチで進められた産業国家への転換は、アジア各地からの出稼ぎ労働者の流入を急増させ、マレー系・華人・インド系などか



写真5 グローバル都市化するKL新都心部の景観

KLタワー展望台よりスペクタクルな新都心KLCCを俯瞰遠望。KLCCは旧競馬場跡地に出現したペトロナスツインタワー（452m、1998年竣工）を中心とするオフィス、ホテル、コンドミニアムなどが林立する摩天楼街である。グローバル都市化を表象するように、2021年現在もこのエリアではツインタワーと肩を並べる、あるいはそれを凌駕する超高層ビルの建設は止むことはない（2007年9月10日撮影）。

ら構成されてきた多民族都市 KL を「トランスナショナル都市化」させた。
フラヌール
 遊歩者の視線から街路景観 (*streetscape*) の写真撮影をしても、チャイ
 ナタウンやブキット = ビンタンなどの繁華街の屋台や食堂、ショッピング
 モールなどで接客している者の多くがネパールなどからの外国人労働者で
 あり、モノレールの車上から建設現場を見下ろすとインドネシア人やバンゲ
 ラデシュ人などの労働者が視野に入ってくる。休日ともなれば、市内のみな
 らず郊外からも気晴らしや友人との出会いのために、外国人労働者がバス
 ターミナルや MRT、LRT 駅付近の繁華街に押し寄せてくる (写真 6・7)。街
 路や広場を占拠する群衆と化した外国人労働者。その現場の混雑ぶり、喧噪
 と緊張をはらんだ場 (情) 景をリアルに叙述することはむずかしい。それゆ
 えに写真撮影は効果的であったと言える。私は遠目から彼らを眺めたり、ま
 た客として外国人労働者と接したりするだけでなく、KL 市庁の中間管理職



写真6 KLCCのショッピングモール前の広場に集うベトナム人労働者

休日・祝日ともなると KL 市街地内外で就労している外国人労働者が、鉄道駅やバスターミナル近くの繁華街に蝟集する。彼らの下支えなくしてはマレーシアの経済社会は成り立たない<包容>すべき存在であるにもかかわらず、地元マスメディアによるネガティブな報道やインターネット上の「声」に煽られて、地元民による外国人労働者に対する<排他>的まなざしは強まるばかりである (2003年11月23日撮影)。



写真7 チャイナタウン

KLの一大観光スポット。1980年代半ば頃、老朽化が進むチャイナタウンの再開発計画が浮上したが、観光立国政策にともない、観光リノベーションによってチャイナタウンは、外国人観光客を呼び込む一大観光空間へと変身をとげた。2000年代には観光客相手の接客業は外国人労働者にとってかわられた。チャイナタウンはもはやチャイナタウンではなく（チャイナタウンの真正性は失われ）、外国人観光客と外国人労働者とのインターフェースと化した（2009年1月18日撮影）。

でスリランカ出身のタミル人（長年の友人）宅のジャワ出身のハウスメイドや、レストランで接客するミャンマー人の若者たちと親しくなり雑談まじりにインタビューもした。また、マッサージ店ではロヒンギャ難民の男性からいくらかサービスを受けながら、問わず語りに母国ミャンマーやKLでの彼と家族の窮状を知ることができた。こうして、私のマレーシア、とりわけKLの研究テーマに外国人労働者をめぐる問題が加えられることとなった（藤巻, 2009a; 2017; 2019）。マレーシア、とりわけKLの場（情）景を記述するうえで、外国人労働者は看過できない存在なのだ。マレーシアにおける外国人労働者に関わっては政治経済学や社会学の研究は多い。それらを参照しつつも、人文地理学出身の私が強く影響を受けたのは、米国のインド系文化人類学者アルジュン・アパデュライの「5つのスケープ論」における“ethnoscape”という概念であり（アパデュライ, 2004: 58-95）、KL出身のインド系社会学

者の Muniandy による KL の出稼ぎ労働者のエスノグラフィー (Muniandy, 2015) であった。

他方、マレーシア政府による観光立国政策によって、同国が国際的な観光目的として発展していくなかで、私の研究関心は観光・ツーリズムへと転じていった。それは先述の「貧困の文化研究会」「スラム比較研究会」の研究活動の延長線上に生まれた「貧困と観光研究会」のプロジェクトと連動するものであった (江口・藤巻, 2010)。とりわけ観光ホスピタリティ部門を下支えする外国人労働者の存在について関心を払ったり (藤巻, 2019)、個人的／集合的に、物理的／想像的に可視化／幻視される観光の現場の風景 (*tourismscape*) の政治社会地理学的読み解きを試みたりもした (藤巻, 2009a; 2010b)。観光の現場に現前する風景こそ、「マレーシア的なるもの」が分泌、生成、表出されたさまざまな次元の景観 (*scape*) が複合しあうメタ景観として解釈できると考えられたからである。こうした観光ツーリズム研究への関心の広がりにともない、私のフィールドワークの舞台は KL にとどまらず、マレーシアにおける周辺の社会集団ともいえるマレー半島の先着先住民族のオランアスリ社会 (キャメロンハイランドやプラウ・ケリー島)、旧英領植民地都市であり 2008 年に世界遺産に登録された後、大衆観光地化したマラッカやペナンのジョージタウンが加えられることとなった (藤巻, 2006; 2009b; 2010a; 2014; 2015; 2016; 2021)。

以上のように、私のフィールドワークをともなうマレーシア研究は、結局は「マレーシア的なるもの」の探究にあったと言える。そして、今なおその途上段階にある。

3. マレーシアを知る：私の方法——ジオグラファー×フォトグラファー

前章では研究遍歴を書き連ねつつ、私のフィールドワークのあり方や方法

についても若干ふれてきた。フィールドワークの意義や方法、その根元的意味を問う思想については、これまでに地理学・文化人類学・社会学・心理学などの分野からさまざまな優れた著作が数多く刊行されているが、私にとって今なお印象的な著作は佐藤郁也の『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』（1992）であった。その後、エスノグラフィ的方法あるいは質的調査にもとづく「フィールドワーク本」の刊行が続いたが、最近刊書としては市野澤らによる論集『観光人類学のフィールドワーク——ツーリズム現場の質的調査入門』（2021）がある。

これらの数多くの著作において指摘されているフィールドワークの要件はほぼ共通しており、具体的には観察、聞き取り調査、写真撮影、ノートに記録することがあげられている。長年にわたり東南アジア島嶼域で調査研究を重ね、1980・90年代に数多くの作品を著してきた「フィールドワークの鉄人」ともいえる鶴見良行による『東南アジアを知る——私の方法』（1995）では、フィールドでの仕事について以下のように簡潔明瞭に記している（鶴見1995）。①歩きながら考える、②精密なノートをつける、③写真を撮る、④たくさん本を読み読書カードをつくる——（ちなみに、佐藤郁也（1992）の著書の副題も「書を持って街へ出よう」とある）。

地理学では、調査地に関する客観的な統計資料や史料、地図の収集や地域調査のデータをもとにした地図の編集、作成が重視されてきた。まずは対象地域の全体像を把握し（エクステンシブに地域をとらえる）、そのうえで現地でのインテンシブな調査に臨む。例えば、役所など地元の機関での聞き取り、地元民に対するアンケートやインタビュー調査による数量的データの収集や住民の語りの採録、観察で得られた知見を地図に書き込むこと（空間の学としての地理学においては「調査地の地図化」が重要な作業である。地図化できないデータは時には捨象されることもある）などを通じて、オリジナルな一次データを収集することが求められてきた。無論、私のマレーシア研究においても、同様の手続きで調査に取組んだ。しかし、日本と異なりマ

レーシアでは、適切な統計データや地図などの地理情報が入手しがたいなどの理由もあって、また研究テーマの性格上、エスノグラフィ的方法あるいは質的調査法が併用された。そのうえで、私は「現場を知る」ための方法として「景観論的アプローチ」を重視し、現場のリアルな場（情）景を記録し、その表象分析の手段としても「写真撮影」にこだわってきた。

「景観の学」を標榜してきた地理学にあつては「地理写真」というジャンルが確立していたが、それは自然的人文的相互作用の複合体、その視覚形態としての地域景観をとらえるという、多分に客観的科学的に分析するための方法であると理解されてきた。しかし、私にとって写真を撮るという行為は、「現場のリアルな場ば景と私が感受した情景」とを活写し、フィールドにおいて視覚化された私の「身体知」そのものを読み手に伝え、地理学的想像力をかきたたせる媒体であるという点において、地理写真と目指すところは若干、異なっているように思われる。ちなみに、社会学でも写真が「社会風景をありありと描写し、社会的想像力をかきたたせる」手段として、ビジュアル・メソッドあるいはビジュアル調査法の名のもと注目を浴びつつあるが（後藤, 2009; ノウルズ・スウィートマン, 2012）、それは研究領域の違いこそあれ、私の考え方と相似的存在である。

1990年代末以降の撮影画像をその場で確認できる液晶パネルを搭載した廉価でコンパクトなデジタルカメラの普及、しかもバッテリーやメモリーカードの容量の増大は、ジオグラファーであるとともにフォトグラファーをもめざした私のフィールドでの写真撮影を大いに駆動させることとなった。さらに、高画質の写真撮影も可能になった携帯電話スマートフォンの出現は写真撮影の大衆化をうながした。これにより、フィールドにおいて写真撮影を「する／される／されているかもしれない」という緊張感は以前に比べてかなり薄れるようになった。こうした状況の変化によって、KLタワーの展望台からの俯瞰遠望写真だけでなく、海外からの観光客も含め不特定多数の人々が行き交う街頭や市場、チャイナタウンの光景を撮ることは以前に比べて躊躇させ

るものではなくなった（写真8）。しかし、スコッター集落の住民、ジャワ人のハウスメイドやミャンマー人のレストラン従業員などの出稼ぎ労働者と対面接触し、その場に居合せ、交渉と相互^{やりとり}交流を必要とするエスノグラフィ的調査の現場ではそうはいかない。

既述のように私は景観論的アプローチを追求し、写真撮影に重点を置くフィールドワークを目指してきた。その理由はすでに述べたとおりである。しかし当然のことながら、高価なカメラや携帯電話を所有しないため写真を撮ったり、撮ってもらったりすることが稀な人々にとって、ファインダー越しに自分や家族、住まいなどが覗き込まれることは、戸惑いや違和感、忌避感を覚えさせたであろうことは想像に難くない。子供たちのように写真を撮ってもらえることを歓迎する人々もいたが、おおむね女性たちは、あちこちをうろろし、立ち止まり、写真を撮る私というよそ者に対する警戒心は強かったはずである。だからこそ私自身、人物そのものを被写体とする写真



写真8 定点観測地：ブキット＝ビンタンのカフェテラス

KLの繁華街ブキット＝ビンタンのあるカフェテラス。ここは、市内での遊歩に疲れると必ず立ち寄る定点観測のための場所であった。カフェでくつろぐ人々や、写真左手の街路の景観や行き交う人々の顔ぶれの変化から、「マハティールの都市」KLのトランスナショナル都市化、グローバル化、そしてメタ景観としてのツーリズムスケープの場景／情景が感受されたものである（2006年8月20日撮影）。



写真9 インタビュー調査中のフィールドワーカー：Kg. Davidson

KLの観光スポットであるチャイナタウン近傍のスコッター集落にて(写真中央が筆者)。フィールドワーカーがフィールドで、とりわけ調査中に写真の被写体になることは珍しい。この写真は、住民に依頼して撮影してもらったものである。少年がインタビューの様子を覗いている。フィールドワーカーは住民から警戒心とともに好奇心をもって覗かれる対象なのだ(1986年8月16日撮影)。

の撮影は、相手の許しが得られない限り避け、場景(居合せた人々を含めてだが)の撮影に徹してきた。とはいえ、住民にとっては、自分たちの生活の場が「撮られる」ことに複雑な思いをしたことであろう。写真撮影は、撮られる側にとっては介入的であり、暴力性を帯びた行為なのだから。

Kg. Davidson と Kg. Chendana では私の素性が次第に住民の間で知れわたり、危険人物ではないことが分かってもらうことができ、集落内を自由気ままに歩けるようになった。ニックネームで声をかけてもらったり、雑談に興じてもらえるようになったりもした。8年間通った Kg. Chendana では、住民の結婚式や、村のサッカーチームと外部のチームとの試合の応援、政治家(マハティール首相!)の支援集会など彼らの「行事」にも参加した。こうした関係構築のなかで、彼らを被写体とする写真を撮る機会が増えていった。撮影された写真は日を置かずしてプリントアウトし、それをお返しにすることで、私が Kg. Chendana の何に関心があるのか次第に理解されるようになっていった。つまり写真は住民との相互理解、＜交歓＞のツールと



写真 10 調査地の住民と交歓するフィールドワーカー：Kg.Chendana

1998年から2005年まで断続的にフィールドワークを行ったKL市街地のマレー系スクォッター集落住民との1年ぶりの再会（写真右2番目が筆者）。調査者／被調査者という関係は溶解し彼らとはすでに「友人関係」になっている。立ち退き後も、私がKLに向向いた際にはコーヒーショップで彼らと旧交を温めることもあった（2004年8月31日撮影）。

なったのだ。カンポンを訪れるたびに、フィールドワークの成果物としての論文や著書を持参し、私がそこで何をしていたのかを英語で解説することもあった。日本語で書かれてはいるが、それらには多数の写真が挿入されていたので、私の目線が何に向いているのか理解してもらえた。彼らの間では、自分たちが私という外部者からどのようにみられているのかが話題となり、おおむね私の研究の意図について好意的に受けとめてもらえたことは何よりだった。

それにしても観光・ツーリズム研究にも身を置く者として、フィールドワーカーは観光客ときわめて相似的であることに気づかされる。観光人類学における「ホスト／ゲスト論」に照らし合わせるならば、フィールドの人びとがホスト、フィールドワーカーはゲストとして見立てられよう。観光ツーリズム研究において、観光倫理や観光客の責任ある行動が重要なテーマとなっているが、フィールドワーカーとて、「倫理」とか「責任あ

る行動」とが問われねばならない。「罪深いフィールドワーク」を回避し、フィールドワークの対象となる人々を尊重する「倫理的フィールドワーク」を遂行してきたのかどうか、また、よりよき「他者理解の旅」の実践者であったのかいなか、あらためて自ら問わなければならない(藤巻, 2009c)。

4. 休みなきフィールドワーカー

既述のように、COVID-19 禍にあっても私のマレーシア研究は決して中断しているわけではない。これまで約 30 年にわたり調査地で撮影してきた膨大な写真を整理し、必要に応じて選別する際にはフィールドでの経験を追憶し、蘇らせることができるからだ。実際、フィールドノートをもとに毎日書き込んだ分厚い日誌や新聞記事など、さまざまなデータをあらためて読み返し再解釈することによって、現場への身体的移動はできないにしても、「あの時／あの場」で撮影した写真画像や日誌、色褪せた新聞記事の切り抜きなどを読み直すことで、私は「あの時／あの場」に立ちもどることができるのだ。そういった意味において写真は、視覚的のみならず臭覚的・聴覚的体験をも生々しく想起させるメディアでもある。

さらに、進化し続けるインターネットなどの情報技術によって、身体移動はできないにしても、私はマレーシアというフィールドへ瞬間移動^{トリップ}もできる。たとえ生の現場での現地の人々との出会いや相互作用、観察や写真撮影はできずとも、現地に関するテキスト・画像情報の入手は容易になってきているのだから。さらに、E-mail や Line によって現地の人々とはつながっている。Zoom を介すれば、インターネット空間上とはいえ画面で居あうことも可能である。つまり、現場でのリアルな身体経験をともなわないにせよ、私のフィールドワークは続けることができているのだ。

参考文献

- アパデュライ、アルジュン（門田健一訳）（2004）『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社
- 市野澤潤平・碓陽子・東賢太郎編著（2021）『観光人類学のフィールドワーク——ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房
- トゥアン、イーファー（小野有五・阿部一訳）（1992）『トポフィリア——人間と環境』せりか書房
- 江口信清編（1997）『「貧困の文化」再考』有斐閣
- 江口信清・藤巻正己編著（2010）『貧困の超克とツーリズム』明石書店
- オスカー・ルイス（高山智博訳）（1971）『貧困の文化』新潮社
- 後藤範章（2009）「ビジュアル・メソッドと社会学手想像力——『見る』ことと「調べる」ことと「物語る」こと」『社会学評論』60(1), 40-56.
- 鶴見良行（1995）『東南アジアを知る——私の方法』岩波書店
- 佐藤郁也（1992）『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』新曜社
- ノウルズ、キャロライン・スイートマン、ポール（後藤範章監訳）（2012）『ビジュアル調査法と社会学的想像力——社会風景をありありと描写する』ミネルヴァ書房
- 藤巻正己（1989）「クアラルンプールのあるインド系スクォッター集落——その中間調査報告——フィールド・ノートより」『天理大学学报』160, 205-248.
- 藤巻正己（1990）「プミプトラ政策と都市社会変動——多民族都市クアラルンプールのスクォッター社会」アジア地理研究会編『変貌するアジア——NIEs・ASEANの開発と地域変容』（pp. 183-205）古今書院
- 藤巻正己（1993）『「都市の村人」考——東南アジア都市研究から眺むれば』森栗茂一編著『都市人の発見』（pp. 21-71）木耳社
- 藤巻正己（1997）「クアラルンプールの生きられたスクォッター・カンボン——1980年代マレーシア都市下層社会の風景」江口信清編『「貧困の文化」再考』（pp. 113-176）有斐閣
- 藤巻正己（2000a）「クアラルンプール大都市地域における外国系スクォッター」『立命館地理学』12, 19-42.
- 藤巻正己（2000b）「1990年代クアラルンプールのスクォッター問題と再定住政策」大阪市立大学経済研究所監修 生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市 [3] クアラルンプール・シンガポール』（pp. 91-120）日本評論社
- 藤巻正己（2001）「クアラルンプールの都市美化政策とスクォッター——新聞記事に描かれたスクォッター・イメージ」藤巻正己編著『生活世界としての「スラム」——外部者の言説・住民の肉声』（pp. 60-93）古今書院
- 藤巻正己（2003）「熱帯のメトロポリス クアラルンプール断章——スクォッター都市から世界都市へ？」『地域研究論集』（国立民族博物館）5（2）, 79-93.

- 藤巻正己 (2006) 「グローバル化するクアラルンプル周辺地域のオランアスリ——半島マレーシア先住民社会の現在と彼らの場所をめぐるせめぎあい」『立命館文学』593, 69-91.
- 藤巻正己 (2007) 「トランスナショナル都市化するクアラルンプル——変貌する熱帯のメトロポリスの民族景観」『立命館地理学』19, 1-11.
- 藤巻正己 (2009a) 「『マハティールの都市』クアラルンプル——生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ」『立命館大学人文科学研究所紀要』93, 25-53.
- 藤巻正己 (2009b) 「キャメロンハイランドのオランアスリ・ツーリズムの可能性——貧困克服のための半島部マレーシア先住少数民族観光をめぐる」藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光——他者理解の旅へ』(pp. 147-163) ナカニシヤ出版
- 藤巻正己 (2009c) 「他者理解の旅へ」(藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光——他者理解の旅へ』(pp. 231-239) ナカニシヤ出版
- 藤巻正己 (2009d) 「グローバリゼーション時代の都市のランドスケープ・エスノスケープ——『マハティールの都市』クアラルンプルを読み解く」春山成子・藤巻正己・野間晴雄編『朝倉世界地理講座 [大地と人間の物語] 3——東南アジア』(pp. 308-319) 朝倉書店
- 藤巻正己 (2010a) 「ツーリズム・マレーシアに動員されるオランアスリ——必要に応じて可視化されるマレー半島の先住民」江口信清・藤巻正己編著『貧困の超克とツーリズム』(pp. 215-248) 明石書店
- 藤巻正己 (2010b) 「ツーリズム [in] マレーシアの心象地理——ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察」『立命館大学人文科学研究所紀要』95, 31-71.
- 藤巻正己 (2014) 「マレーシアにおける遺産観光と利活用される植民地経験——再資源化されるコロニアリティ、ハイブリディティ」天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし——再魔術化される観光』(pp. 37-58) 天理大学出版部
- 藤巻正己 (2015) 「遺産観光ブームに沸くマラッカのツーリズムスケープ瞥見——過熱する観光開発・大衆観光地化・テーマパーク化」立命館大学地理学教室編『観光の地理学』(pp. 304-331) 文理閣
- 藤巻正己 (2016) 「世界遺産都市ジョージタウンの変容するツーリズムスケープ——歴史遺産地区の観光化をめぐるせめぎあい」『立命館文学』645, 137-162.
- 藤巻正己 (2017) 「グローバル都市化するクアラルンプル——変貌する熱帯のメトロポリスのエスノスケープ」阿部和俊編『都市の景観地理——アジア・アフリカ編』(pp. 1-12) 古今書院
- 藤巻正己 (2019) 「チャイナタウンはもはや“チャイナタウン”ではない! ——“外国人労働者の街”だ!」『立命館大学人文科学研究所紀要』119, 29-55.
- 藤巻正己 (2021) 「世界遺産地区ベナン・ジョージタウンにおける『大衆観光地化』批判

——COVID-19を契機として脱観光的／節度ある観光地へと仕切り直すべきだ!』『立命館大学人文科学研究所紀要』125, 185-223.

Muniandy, P. (2015) *Politics of the Temporary; An Ethnography of Migrant Life in Urban Malaysia*, Malaysia: Strategic Information and Research Development Centre.

